

海堡

Kaihou

東京湾海堡ファンクラブニュース

No.6

題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺田正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋時絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 第3回総会報告
- 第二海堡見学会報告
- 第3回シンポジウム報告
 - ・ 第一海堡の現況
 - ・ 第一海堡の護岸状況
 - ・ 管理者の意向
 - ・ 海外事例
 - ・ 「第一海堡の活用」に対する自由討論
- ニュース
- 「ヨコスカお魚天国」での活動
- 会則 / コラム【長浜佐一郎】 / 入会案内

第1号議案 2003年度事業報告

年	月	日	会報	行事
2003	4	26		現地見学会2(横須賀) 猿島 役員会
	5			
	6	21		通常総会 シンポジウム2〔富津公民館〕 「東京湾防衛史序説」 「景観資産としての東京湾海堡」
	7			
	8			
	9	12		現地見学会3(横須賀) 「第二海堡・第三海堡」
	10		会報第3号の発行	
	11			
	12		会報第4号の発行	「東京湾海堡シンポジウム」開催のお知らせを送付。
2004	1			
	2			
	3			

第3回総会報告

第3回総会が2004年6月19日、富津公民館で開催されました。会員111名のうち、総会出席者は59名(委任状提出者含む)で、定足数の過半数を超えましたので、総会は成立し、下記議案が決議されました。



2004.6.19 第3回総会風景

第2号議案 2003年度決算報告

項目		予算額	決算額	差違	備考
収入の部	会費	190,000	237,000	47,000	
	参加費	0	77,000	77,000	シンポジウム・見学会参加費
	資料代	0	2,500	2,500	シンポジウムに不参加者
	雑収入	0	488	488	損害保険手数料戻り
	前期繰越金	3,564	3,564	0	
	計	193,564	320,552	126,988	
支出の部	印刷費	80,000	47,300	-32,700	会報2回発行、シンポジウム資料・見学会資料
	通信費	54,400	37,184	-17,216	会報の送付、見学会・シンポジウムの案内、役員会連絡、ホームページ管理料
	講師謝金・交通費	30,000	20,000	-10,000	見学会講師謝金(遠方10,000円、関東近郊5,000円、幹事0円)
	シンポジウム飲食代	0	4,620	4,620	
	文房具・備品	18,000	17,692	-308	ゴム印、ハンドマイク
	渡船費用	0	16,200	16,200	
	保険料	0	24,455	24,455	見学会で傷害保険に加入
	手数料	0	315	315	振込手数料
	計	182,400	167,766	-14,634	
	次期繰越金	11,164	152,786	141,622	収入 - 支出

第3号議案 2003年度事業計画

年	月	日	会報	行事
2004	4			
	5		会報第5号の発行	現地見学会4(横須賀) 「第二海堡・第三海堡」 「追浜ケーソンヤード」
	6			通常総会 シンポジウム3(富津公民館) 「第一海堡の保存と活用について」
	7		会報第6号の発行	
	8			現地見学会6(横須賀) 「第二海堡・第三海堡」 「追浜ケーソンヤード」
	9		会報第7号の発行	シンポジウム4(東京) 「第二海堡の保存と活用について」
	10			現地見学会7(横須賀) 「第二海堡・第三海堡」 「追浜ケーソンヤード」 あるいは、「観音崎砲台跡(観音崎公園)」
	11		会報第8号の発行	現地見学会8(富津) 富津埋立資料館 大乘寺 富津岬
	12			
2005	1		会報第9号の発行	
	2			
	3			

第4号議案 2004年度予算案

下記予算案を承認した。

収入			支出		
項目	金額	備考	項目	金額	備考
個人会員	186,000	93名(2,000円/年)	会報の発行	150,000	150円×5回×200部
法人会員	80,000	8社(10,000円/年)	通信費(会報)	40,000	80円×5回×100部
見学会・シンポジウム参加費	70,000		通信費(見学会・研究会お知らせ)	30,000	50円×6回×100部
前期繰越金	152,786		文房具	10,000	
			資料コピー代	70,000	
			講師謝礼・交通費	30,000	
			シンポジウム会場費・飲み物代	20,000	
			保険料	50,000	
			次期繰越金	88,786	
収入計	488,786		支出計	488,786	

【予算との差異】 予算と実績とが大きく違った理由。

幹事の努力で、法人会員が8社と増え、収入が増加した。
シンポジウムと見学会において参加費を徴収したため、収入が増えた。
会報の発行が遅れ、2003年度に発行予定のものが一部2004年度にずれ込み、印刷費と通信費の支出が少なかった。

第6号議案 2003年度役員選任の件

- 会長 高橋在久(東京湾学会理事長・江戸川短期大学名誉教授)(重任)
- 副会長 西田好孝(東京湾海堡建設従事者子孫代表)(重任)
- 幹事 仲野正美(横須賀市立衣笠小学校教頭)(重任)
- 幹事 安室真弓(東京湾学会理事)(重任)
- 幹事 小坂一夫(富津市文化財審議委員)(重任)
- 幹事 松本庄次(富津公民館長)(重任)
- 幹事 小沢洋(富津公民館主査)(重任)
- 幹事 朝倉光夫(東亜建設工業(株))(重任)
- 幹事 西田信吉((株)港建技術サービス)(重任)
- 幹事 長崎哲士(彫刻家)(重任)
- 幹事 勝 巖(新横商事(株))(重任)
- 幹事 高橋克(千葉県文化財課)(新任)
- 幹事 渡辺京子(新任)
- 幹事(事務局長) 島崎武雄((株)地域開発研究所)(重任)
- 幹事(会計) 高橋悦子((株)地域開発研究所)(重任)

第二海堡見学会報告

第二海堡見学会を下記日程で実施しました。見学会の希望者が多く、富津と横須賀から46名が参加しました。

記

日時：平成15年6月5日(土)10:00~13:00
 集合場所：富津公民館、東京湾口航路事務所
 講師：ファンクラブ幹事 小坂一夫氏
 ファンクラブ幹事 西田信吉氏
 参加費：1,000円(傷害保険、資料代)



2004.6.5 第二海堡見学会

第3回シンポジウム報告

第3回海堡シンポジウム「海堡シンポジウム」- 第一海堡の活用を考える - が2004年6月19日、富津公民館で開催されました。

〔講師・内容〕

- 飯国琢史氏 第一海堡の現況（上陸写真の上映）
小坂一夫氏 第一海堡の護岸状況（10年間の変化）
高橋悦子氏 管理者の意向（千葉財務事務所ヒヤリング結果）
島崎武雄氏 海外事例（海外にみる海堡の活用）
「第一海堡の活用」に対する 自由討論
〔司会〕高橋在久会長

第一海堡の現況 （上陸写真）

飯国琢史



港跡（上陸地点）2004.3.27 撮影



煙突状レンガ 2004.3.27 撮影



第1砲台 2004.3.27 撮影



第1砲台下部を上から見たところ 2004.3.27 撮影



仮弾薬庫内部 2004.3.27 撮影



第3砲台電灯井 2004.3.27 撮影

第一海堡の護岸状況 (10年間の変化)

小坂一夫

(1) 10年前の第一海堡南側護岸



1994.2.18 小坂一夫撮影

(2) 現在の第一海堡南側護岸

護岸の崩壊が進み、南側は4分の1程度しか護岸が残っていない。土が露出している。



2004.5.11 小坂一夫撮影

←→は崩壊部分の幅を示す。



護岸崩壊部分

管理者の意向 (千葉財務事務所へのヒヤリング結果)

高橋悦子

訪問日時：2004年5月20日 AM10:00～11:00

訪問先：財務省 関東財務局 千葉財務事務所 第1統括
〒260-8607 千葉市中央区椿森5-6-1
tel.043-251-7211 fax.043-256-0600

同行者：小坂一夫幹事、島崎武雄事務局長
管理について

(1)平成13年(2001)から立て看板で「立入禁止」を注意喚起しているが、常勤警備はしていない。

(2)文化庁などの調査以外の上陸は許可していない。

立入禁止について

- (1)軍事施設だった所なので、海堡内に不発弾が残っている可能性がある。安全性が確認できないため、立入禁止としている。また、警備員がいないので、落書きや人為的な損壊も考えられ、禁止としている。
- (2)財務省が不発弾調査をして、安全性を確認し、利用することはない。
- (3)文化庁が文化財に指定する、あるいは、富津市が公園化するといった具体的な計画が出た場合、財務省から計画を実行する団体に管理者を変更する。不発弾調査は、管理者となったところからすることになる。
- (4)猿島でも横須賀市が公園整備したとき、大量の不発弾が見つかった。不発弾の処理費用は、横須賀市が負担した。
- (5)不発弾は、地中に残されているものもあるので、これまで事故がなかったからといって、「絶対にない。」とはいえない。

管理者の変更について

- (1)文化庁が管理者になる場合は、国の機関なので、所管換えとなる。
- (2)文化財になれば、その時点で文化庁に所管を渡すことになる。
- (3)富津市が管理者になる場合は、無償貸し付け、あるいは、売り払いとなる。譲与はなく、時価での売り払いになる。“時価”とは、相当の対価であって、現時点で具体的な価格は答えられない。
- (4)利用の方向性が決まれば、管理者の変更は問題なく進む。
- (5)以前は、富津公園から第一海堡に公園をつなげる計画もあった。
- (6)富津公園の所有者は財務省で、千葉県に貸与している。
- (7)猿島の場合は、旧軍港市転換法により所有権を横須賀市に譲与した。

民間利用について

- (1)公共の使用が望ましいが、最終的に他にない場合は、民間利用の可能性はある。
- (2)第一海堡は国定公園に指定されている地区の中にあるので、利用内容は、規制の範囲内のことしかできない。

海外事例 (海外にみる海堡の活用)

島崎武雄

第一海堡の港や護岸修復について

- (1) 予算的なことを考えると、護岸修復工事を財務省がすることは難しい。
- (2) 護岸修復工事も港の浚渫も利用者となる団体が行うことになる。港を浚渫すれば、上陸者を増やすことに繋がるので、財務省では行わない。

第二海堡

・第二海堡の管理者は海上保安庁になっている。

住所：富津市洲端 2433 47,798 m² (謄本)

管理者の意向のまとめ

財務省としては、国有財産の有効活用が望ましいと考えているので、利用の方向性が決まれば、その利用計画に基づき、管理者を変更する予定である。

港の浚渫や護岸の修復は、財務省では行わないので、まず、管理者となる団体と利用の方向性を決めることが第一海堡活用の第一歩となる。

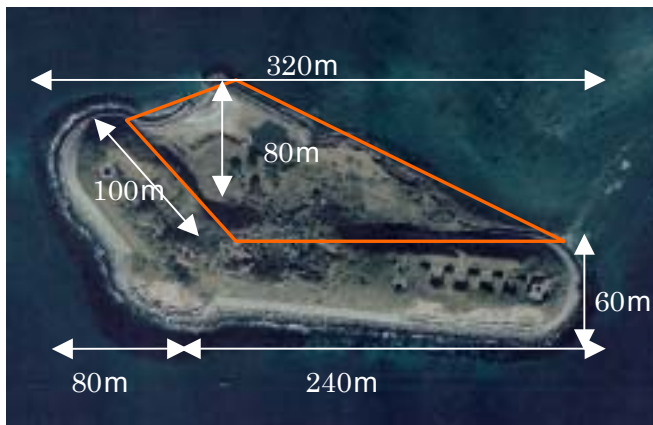
第一海堡の住所と面積

(1) 住所：富津市黒塚 2432

(2) 面積

千葉財務事務所での管理データ	70,938.84 m ²
謄本の面積	58,267 m ²
航空写真から求めた面積	約 38,000 m ² (砂で埋没した港部分含む)
建設当時の記録(陸軍文書)	23,000 m ²

管理データと謄本の数値が一致しない点については、千葉財務事務所に問い合わせたが、理由は不明だった。また、千葉財務事務所によると、管理台帳の数字は、海中の基礎部分の面積を含んでいると推測されるとのことだったが、実測図はない。



第一海堡 航空写真

はかつての港部分 (今は砂で埋まっている。)

1. ロシアのクロンシュタット海堡

1.1 『富津海堡要領并説』(明治 14 年 1881 作成と推定)

[大日本帝国陸軍築城部本部：『東京湾要塞築城史・附録』、現代本邦築城史、第 2 部第 1 巻 (1943.4)]

富津砂州は東京湾口第一の要地なので、ここに海堡を建設することとし、明治 8 年(1875)から調査を始め、明治 13 年 (1880) 8 月、富津脇塚に捨石を置き、工事を開始した。計画・設計に当たっては、英国のスピチート、スピットバンク、ブリックワテル、プリムーツ、カリソンプワン、プロシア国のウェセール、ロシアの丁字海堡の各海堡につき、形状などの詳細を調査した。その結果、富津海堡の計画・設計に当たっては、ロシアのトルヘン将軍が計画した、左右両翼を広げた丁字型海堡を採用した。ロシアの丁字台場は、トルヘンが英国のプリムーツ海堡、フランク海堡、スピチート海堡を調査の上、これらと異なる形状の丁字形海堡の建設を提案し、これがロシア政府に採用されたものである。

1.2 現状

1.2.1 クロンシュタット要塞の経緯

ロシアの丁字海堡は、サンクトペテルブルグ市(旧レニングラード市)前面のフィンランド湾に建設されたクロンシュタット海堡群に含まれている。

1703 年、ロシア皇帝ピョートル大帝 (1672 ~ 1725、1682 年即位) は北方戦争 (1700 ~ 1721) でスエーデンの侵入を防ぐため、ペトロパヴロフスク要塞を建設し、これよりサンクトペテルブルグの町が誕生した。1712 年、ピョートル大帝は首都をモスクワからサンクトペテルブルグへ移し、以降、1918 年に再びモスクワに遷都するまで、サンクトペテルブルグは 200 年間にわたって帝政ロシアの首都となっていた。

サンクトペテルブルグの前面、西 30km、フィンランド湾内の海中にコトリン島があり、ここに首都を守るためのクロンシュタット要塞が築かれた。そして、コトリン島のクロンシュタット要塞を拠点として、周辺海域に首都防衛のためのクロンシュタット海堡群が建設された。サンクトペテルブルグとクロンシュタット海堡群の関係は、ちょうど東京と東京湾海堡の関係に相当する。東京湾海堡の最初である富津海堡(のちの第一海堡)の計画に当たっては、クロンシュタット海堡群のうちの丁字海堡が手本とされた。



[資料] GEO CENTER : 『EURO-CITY MAP 1:15000 ST PETERSBURG』 2000 年より作成。

図 - 1.1 サンクトペテルブルグ市とクロンシュタット海堡群



[資料] ЕВРОКАРТА, «КРОНШТАТТ 3» より作成。
図 - 1.2 クロンシュタット海堡群

1.2.2 南航路と海堡群

歴史的にも、サンクトペテルブルグ防衛のためには南航路の防衛が重要だったので、クロンシュロット(1704年)・ピョートル 世(1724年)・パベル(1800年)・アレクサンダー(1854年)海堡と、海堡群建設初期に南航路に海堡が集中して建設され、その後、1856年に南第一・南第二(ズツカネツ)・南第三・南第四(コンスタンチン)の4海堡が建設された。なお、トルコを敵とするクリミア戦争が1853-56年に戦われ、この時に多くの海堡が建設されている。

アレクサンダー海堡は、疫病研究と患者収容のために使用された。



写真 - 1.1 アレクサンダー海堡の全景 (2003.7.7 撮影)



[資料] A. A. Pa

, 1988

図 - 1.3 建設当時のアレクサンダー海堡



写真 - 1.2 アレクサンダー海堡 (2003.7.7 撮影)



写真 - 1.3 最初に建設されたクロンシュロット海堡 (2003.7.7 撮影)

1.2.3 北航路と海堡群

コトリン島と東対岸のゴルスカヤ()との間に大西洋からフィンランド湾に侵入するうねりを阻止する防潮堤が、道路を兼ね、北航路を横切って建設されている。この北防潮堤に沿い、北第一海堡から北第七海堡まで7個の海堡が残存している。北第六海堡と北第四海堡が丁字海堡であり、東京湾第一海堡の手本となった。

1.2.4 北第四海堡

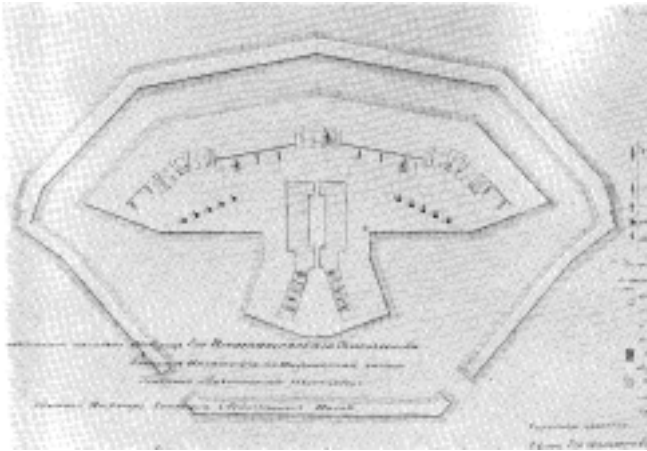
(1) 経緯

北第四海堡と北第六海堡はともにクリミア戦争時の1856年に建設されており、平面図もほぼ同じである。現地でも、北第四海堡と北第六海堡が同一の構造であり、ともに丁字海

堡と呼ばれていることが確認できた。

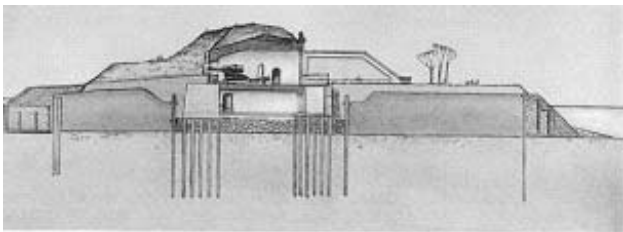
北第四海堡と北第六海堡は、ともにトトルベン（Edward H. Totleben、1818~）が計画を作り、ゼーレフ（海軍大佐、造船技師）が施工監督をした。

（ 2 ）平面図と断面図



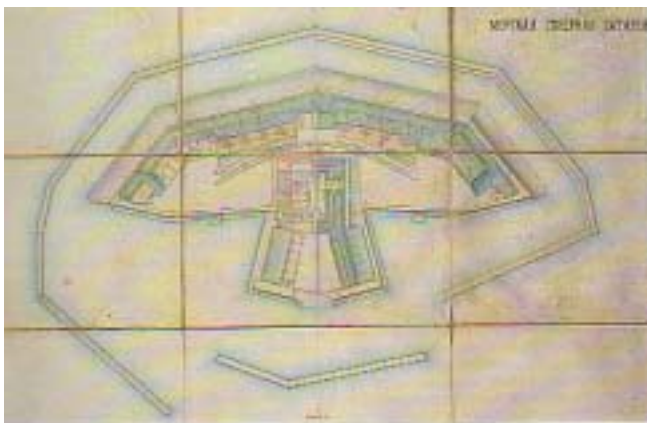
[資料]А.А.Раэдоггин, Ю.А.Скориков, «КРОНШТАДТСКАЯ КРЕПОСТЬ»,СТРОЙИЭДАТ, 1988

図 - 1.4 クロンシュタット北第四海堡平面図



[資料]А.А.Раэдоггин, Ю.А.Скориков, «КРОНШТАДТСКАЯ КРЕПОСТЬ»,СТРОЙИЭДАТ, 1988

図 - 1.5 1860年代の海堡断面図



[資料]А.А.Раэдоггин, Ю.А.Скориков, «КРОНШТАДТСКАЯ КРЕПОСТЬ»,СТРОЙИЭДАТ, 1988

図 - 1.6 北第六海堡平面図



[資料]А.А.Раэдоггин, Ю.А.Скориков, «КРОНШТАДТСКАЯ КРЕПОСТЬ»,СТРОЙИЭДАТ, 1988

図 - 1.7 北第六海堡横断面図

（ 3 ）現状



写真 - 1.4 北第四海堡全景（2003.7.10撮影）



写真 - 1.5 北第四海堡の背後部（2003.7.10撮影）



写真 - 1.6 北第四海堡の背後端部（2003.7.10撮影）



写真 - 1.7 北第四海堡砲壘右端部（2003.7.10撮影）



写真 - 1.8 北第四海堡砲壘中央部（2003.7.10撮影）

2. イギリスのスピットバンク海堡

2.1 スピットバンク海堡全景

スピットバンク海堡 (Spitbank fort) は、イギリスのポーツマス (Portsmouth) にある。



〔資料〕国際地学協会：『総合世界・日本地図』1992より作成。

図 - 2.1 スピットバンク海堡の位置

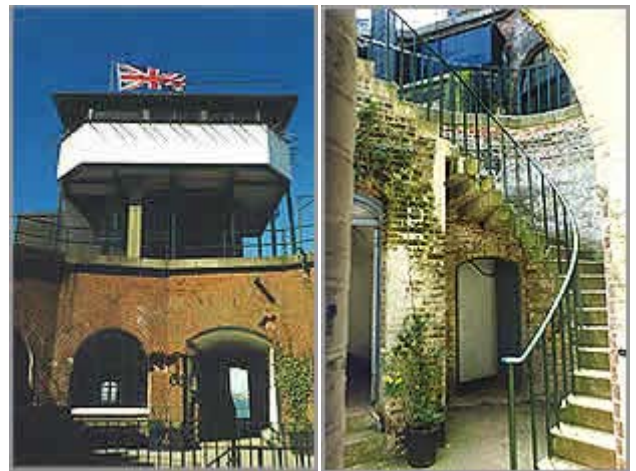


〔資料〕THE CENTER FOR FORT PRESERVATION AND TOURISM ホームページ

写真 - 2.2 スピットバンク海堡

(1) レストラン

スピットバンク海堡はレストランがあり、パーティ会場として利用することができ、結婚パーティなども行われている。



〔資料〕Spitbank fort ホームページ

(2) 歴史資料館

スピットバンクの歴史を紹介する歴史資料館もある。



〔資料〕Spitbank fort ホームページ

3. 世界遺産に指定された海堡

アイセル湖の南西部、マルケルワールト湖に浮かぶ、パンプス (Pampus) 海堡は、アムステルダム港の入口を防衛するために建設された。環濠に囲まれ、2基の砲台跡がある。



〔資料〕講談社：『ユネスコ世界遺産 13 新指定』、1998.7.28

写真-3.1 パンプス海堡

「第一海堡の活用」に対する 自由討論

国名：オランダ王国

所在地：ノートル・ホラント州及びユトレヒト州 首都アムステルダムから半径15キロメートルから20キロメートルの距離

完成年：1920年

世界遺産登録年：1996年

指定理由：時代を超越して、建設、モニュメンタルアート、あるいは都市計画及び景観などの発展に重要な影響を与えたもの。
ある洋式の建築物、あるいは人類の歴史上、重要な発展段階を示す景観の代表的な例となるもの。
単一、あるいは複数の文化を代表する伝統的集落、土地利用のきわだった例。



[資料 講談社:『ユネスコ世界遺産 13 新指定』、1998.7.28
図-3.1 パンプス海堡の位置



[資料 講談社:『ユネスコ世界遺産 13 新指定』、1998.7.28
写真-3.2 パンプス海堡の様子



[資料 講談社:『ユネスコ世界遺産 13 新指定』、1998.7.28
写真-3.3 パンプス海堡の様子

国土交通省 東京湾口航路事務所 坂本所長が出席され、下記の挨拶がありました。

坂本所長挨拶：第三海堡の撤去物は魚礁にしたり、追浜のヤードで展示したりしています。撤去工事の様子や第三海堡撤去展示物が見たい方は、土日でも船を出して、案内しますのでご連絡下さい。

意見1：東京湾学の継承者、東京湾の文化史・生活史の研究者として感心を向けていきたい。将来は富津岬と第一海堡を地理的、精神的に連結させて国土歴史公園の創立を目指したい。国土歴史公園はあらゆる21世紀の文化史にとって、不可欠の拠点となるのではないか。

意見2：基本的には現状維持のまま保存するのが良いと思うが港は船がつけるようにある程度整備した方がよい。船でわたる方法しかないので、ある程度人の特定や、人数を限定できる。

意見3：せめて10年前くらいの姿に戻すべき。この状態のまま放置していくと、富津岬も第一海堡もそのうち無くなってしまわないか。昔は繋がっていて歩いて行けた富津岬と第一海堡が現在の様な状況になったのは自然破壊である。

意見4：昔は砂船というものがあって、毎日富津から横須賀まで波打ち際から取った砂を終戦後も売りに行っていた。第一海堡と富津岬の間は潮の流れが速く、砂が柔らかいので歩くのは危険。

意見5：第一海堡の現在の写真には驚いた。第一海堡は財務省、つまり国のものなので国がもっとお金や技術を提供して行くべきなのは。国の技術を活用すべき。フランスのラ・ロッシュェルという要塞は微妙に陸と続いているので海堡とは言えないかも知れないが、低い所はヨットハーバーに、高い所の部分はレストランとして利用されている。また、そこから少し離れたイルドレという要塞跡も同じように活用されている。

意見6：第一海堡は、フランスのモンサンミッシェルに似た魅力を秘めている。

意見7：日露戦争を中心とした第一海堡の変遷について興味を持っている。

意見8：日露戦争時、海堡があったため、ロシア艦隊は東京湾に入ってこなかったという話を聞いたことがある。やはり海堡は防衛の要であった。

意見9：第一海堡に見学はファンクラブなどで見学できるよ

うにして欲しい。視察をしたら、もっと意見が出るのではないか。現地を見ないことには、あまり意見を言うこともできない。

海堡の崩壊の進んでいる所は石を積むなりして修復した方が良いのではないか。

意見 10：富津市としては文化財の方から動いているので、第一海堡の活用に向けて良い方向に向かって行きたい。かつては釣りの渡し船があったが、採算が合わないので廃止になった。

意見 11：富津の住民として、海堡建設に従事した何百人もの人々の気持ちをもって、残していかなければならない。

第一海堡と富津岬は、とてもきれいな風景なので、守っていかなければならない。

意見 12：軍事遺跡として、文化財指定を受け、保護した方が良い。

意見 13：若い人は、地元でも“海堡”という言葉自体を知らない。多くの人に知ってもらうことが大切だ。

以前は、釣り人が利用する第一海堡までの渡し船があった。今は、港が砂に埋まって使用することができなくなっている。港の周りの防波堤はしっかりできているので、港を浚渫すれば、利用できるようになる。

意見 14：第二海堡に見学に行ったとき、護岸が壊れたところに大アサリが湧いていた。海堡は、自然環境がとても良いところだ。

当ファンクラブ、第一海堡ならびに第二海堡の活用に関するシンポジウムを今後も開催し、議論の場を持ち、海堡の価値の理解と普及を目指す。

訃報

当ファンクラブの元幹事の鈴木元氏が2004年10月25日に58歳にて逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

「ヨコスカお魚天国」での活動

「ヨコスカお魚天国」(第三海堡見学会&稚魚放流 in うみかぜ公園)の概要

日時：2004年6月27日(日) 午前11時より

内容：第三海堡見学ツアー

アクアキャンドルをつくろう(工作教室)

ビーチクリーンアップ&ヒラメの稚魚の放流

主催：東洋建設株式会社 国土総合建設株式会社

協賛：国土交通省 関東地方整備局 東京湾口航路事務所

横須賀市東部 漁協 横須賀支所 後援者グループ

横須賀海上保安部

お魚天国の会場において、当ファンクラブでは、海堡を説明するパネル展示と会員募集を行いました。

当日は、横須賀市の小中学生と父兄を中心に、大勢の方が参加しました。



当ファンクラブから、海堡を説明するパネル展示をしました。



会場に集まった参加者

ニュース

千葉テレビで放送される

千葉テレビで「海堡」について特集番組があり、当ファンクラブの活動の様子(6月のシンポジウム)が紹介されました。

日時 7月19日(月)及び20日(火) 海の日特集として
午後9時～10時報道番組の中(2日間各8分間)
「海に眠る匠の技～東京湾海堡～」

当ファンクラブの高橋会長と西田副会長へのインタビューもありました。

東京湾海堡シンポジウムの開催

『房総から東京湾海堡を語る』

日時：平成15年12月18日(土)13時～17時

場所：千葉県富津市・富津公民館

当日は、JR君津駅南口からシャトルバスを運行。

主催：国土交通省関東地方整備局 東京湾口航路事務所

共催：富津市 後援：千葉県

協力：(財)WAVE、東京湾学会

記念講演 小野寺駿一氏 (社)日本港湾協会名誉会員

「叢智を結集した海堡建設」

東京湾海堡建設の計画から施工までの歴史の概要を話していただく。

演劇 千葉県立君津高等学校演劇部 『海堡技師』より

岩野泡鳴の詩劇『海堡技師』は、本来、上演を目的として作られたものではないが、「海堡技師」を基に朗読劇を作り、地元の県立君津高等学校の生徒が上演する。脚本・構成は、君津高等学校・演劇部顧問の酒井一成氏による。

講演 高橋在久氏 東京湾学会理事長 「ドンタクなしの海堡建設と富津の人々」

本シンポジウムの中心テーマである「房総の人・山・浜が東京湾海堡を造った。」について語っていただく。

パネルディスカッション

テーマ：『第一海堡と第二海堡の可能性』

コーディネーター 日本大学教授 伊東孝氏

パネリストと話題提供

中村俊彦氏 千葉県立中央博物館生態・環境研究部長〔海堡と富津岬と景相生態学〕

高村聡史氏 国学院大学文学部講師〔海堡建設と房総との関わり - 永島家文書から〕

小坂一夫氏 富津市文化財審議委員〔海堡建設と富津〕

坂本正俊氏 東京湾口航路事務所長〔第三海堡の撤去工事と引き上げた遺物の活用〕

高橋会長、小坂幹事が講演します。参加申し込み方法は、チラシをご覧ください。富津公民館でも受け付けています。

東京湾海堡ファンクラブ会則

第1条(名称)

当会の名称は、「東京湾海堡(とうきょうわんかいほう)ファンクラブ」とする。

第2条(目的)

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

第3条(事業)

当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。

(2) 会報の発行(年4回)。

(3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。

(4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

第4条(会員)

当会の目的、事業に賛同する個人または法人(グループを含む)を会員とする。

第5条(入退会と会費)

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申し込むものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。

会員は、下記の年間会費を納入する。

年間会費は、個人会員2,000円、法人会員10,000円とする。

会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものとみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

第6条(総会)

総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。

(1) 総会は、会員をもって構成する。

(2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定足数については委任状をもって代えることができる。

(3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。

(5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

第7条(会員の権利)

会員は、次の権利を有する。

(1) 総会に参加すること。

(2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。

(3) 会報の無料配布を受けること。

(4) 収集した資料・情報を閲覧すること。

(5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動に参加すること。

第8条(資格の喪失)

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

(1) 退会したとき。

第9条(役員)

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事(事務局長) 幹事(会計)を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

第10条(役員職務)

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

第11条(会計)

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第12条(事務局)

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野2-7-6東上野T.Iビル(株)地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

第13条(付則)

当会則は、2003年6月21日から改定実施する。

役員

会長 高橋在久(東京湾学会理事長・江戸川大学名誉教授)

副会長 西田好孝(東京湾海堡建設従事者子孫代表)

幹事 仲野正美(横須賀市立衣笠小学校教頭)

幹事 安室真弓(東京湾学会理事)

幹事 小坂一夫(富津市文化財審議委員)

幹事 松本庄次(富津公民館長)

幹事 小沢洋(富津公民館主査)

幹事 朝倉光夫(東亜建設工業(株))

幹事 西田信吉((株)港建技術サービス)

幹事 長崎哲士(彫刻家)

幹事 勝 巖(新横商事(株))

幹事 高橋克(千葉県文化財課)

幹事 渡辺京子

幹事(事務局長) 島崎武雄((株)地域開発研究所)

幹事(会計) 高橋悦子((株)地域開発研究所)

コラム

長浜 佐一郎(ながはま さいちろう)(1852~1925)

長浜佐一郎は、嘉永5年7月1日(1852.8.15)、熊本県下益城郡杉村字杉島(現・富合町杉島)で土族の長男として生まれました。長浜家は、代々、肥後熊本藩主に仕えていたもので、佐一郎も15歳で藩主・細川侯に奉仕しました。19歳のときに熊本鎮台に入隊、明治10年(1877)に勃発した西南戦争には、官軍として従軍しています。¹

明治維新後、明治15年(1882)に上京し、当時、横浜にあった東海鎮守府に文官として勤務していましたが、鎮守府が横須賀に移されることになり、明治17年(1884)横須賀鎮守府勤務となります。横須賀鎮守府で書記官として勤務していましたが、佐世保鎮守府への転勤命令を機に退官し、事業家の道を進むこととなります。¹

事業家としての佐一郎は、横須賀市で味噌・醤油・燃料の仕入れ方を始め、第二海堡建設のために集まっていた工夫や船頭の飯場に酒などを納めていました。そして、海堡建設工事関係者の羽振りが良いのを見て、土木業を始めたといわれています。遺族の話によると、第三海堡の建設にも従事していました。²

また、佐一郎は、大倉土木(現・大成建設)永島家とも親しかったと伝えられています。明治28年(1895)、土木建築請負業「長浜佐一郎商店」を開業し、明治39年(1905)、土木建設業「長浜組」を創業します。¹

大正4年(1915)9月発行の『現代の横須賀』では、横須賀での土木建築請負業者として最も成功を収めた者として、小泉岩吉、馬淵曜、三上文太郎とともに、長浜佐一郎の名が挙げられています。邸宅は、木造瓦葺2階建、総延坪数約130坪、室数20室、畳数124枚敷と大きく、「白浜御殿」と称されました。佐一郎は、米国建築家フランク・ロイド・ライト(F.L.Wright, 1867~1959)設計による東京の帝国ホテルの建設にも参加しています。³

事業家以外の顔としては、横須賀市が施行された明治40年(1907)には、名誉職参事会員に任命されました。¹

さらに、晩年には、関東大震災により大きな災害を被った横須賀市の再建のため、「横須賀市復興会」の運輸交通及び通信委員部の委員長として近代都市横須賀の建設に尽力し、大正14年(1925)9月、74才で亡くなっています。¹

長浜組の書類は、すべて関東大震災で焼失しているため、第三海堡に関連する書類は残っていません。長浜組は、永島庄兵衛のように埋立工事業に発展することはなく、建築業(後に長浜工務店と改名)で引き継がれていましたが、平成10年(1998)ころ、長浜工務店は廃業しています。²【高橋悦子】

【註】

1)横須賀の文化遺産を考える会『横須賀市参事会の人々』2001.1.15

2)長浜つぐお氏(長浜佐一郎の孫)へのヒヤリング

3)永田是治(編)『現代の横須賀』, 1915.9; 『横須賀郷土資料叢書第8号』, 横須賀郷土資料復刻刊行会, 1981

[次回は山県有朋について紹介します。]

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人(グループを含む)の入会を募集しております。

入会希望者は、下記事務局まで申込み用紙をご請求ください。申込み用紙は、ホームページ(<http://www.babu.jp/~kaihoufc/>)からでも入手できます。

会費は下記口座にご送金ください。

銀行振込口座

東京都民銀行 御徒町(おぢまち)支店 普通預金 4011598
「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子(トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」
郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」
会費(年間) 個人会員:2,000円 法人会員:10,000円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
(株)地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
事務局長: 島崎武雄 会計: 高橋悦子
電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
HomePage: <http://www.babu.jp/~kaihoufc/>
E-mail: kaihoufc@babu.jp

E-mail を事務局までご連絡ください。

見学会やシンポジウムの案内など、郵送より早くお知らせすることができます。

皆さまからのお便りをお待ちしています。

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

第一海堡、第二海堡の活用方法についてもご意見もお待ちしています。

「海堡」 *kaihou* No. 6

- 東京湾海堡ファンクラブニュース - 第6号

東京湾海堡ファンクラブ 2004年12月3日発行